

平成 23 年度東京都写真美術館自主企画展

ジョセフ・クーデルカ プラハ 1968

—この写真を一度として見ることのなかった両親に捧げる—

Invasion 68: Prague Josef Koudelka



Josef Koudelka, from the Aperture monograph Invasion 68: Prague, © 2008
Josef Koudelka/ Magnum Photos

開催期間＝2011年5月14日（土）～7月18日（月・祝）

会場＝東京都写真美術館

主催＝公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／朝日新聞社

後援＝チェコセンター

協力＝平凡社／マグナム・フォト東京支社

協賛＝東京都写真美術館維持会員 ほか

“Invasion 68: Prague” is organized by Aperture Foundation in collaboration with Josef Koudelka, and co-produced with Magnum Photos. This exhibition is made possible, in part, by generous support from Mark and Elizabeth Levine.

Additional support provided by HP and Coloredge.

■展覧会概要

東京都写真美術館では、フォト・ジャーナリズム史に伝説として名を刻むジョセフ・クーデルカの展覧会を開催します。

ジョセフ・クーデルカ（1938年チェコスロヴァキア生まれ）は、1968年8月に起こったチェコ事件（ワルシャワ条約機構軍のプラハ侵攻）時、団結して兵士に抵抗した市民の攻防を写真におさめました。しかし「プラハの春」が終焉を迎え、ソ連が導く共産主義へ「正常化政策」が敷かれる中では、これらの写真は許される記録ではありませんでした。そこで、これらの写真はプラハの写真史家とスミソニアン博物館の学芸員等の手によって秘密裏にアメリカへ持ち出されました。そして、当時のマグナム会長エリオット・アーウィットを経て、翌69年「プラハの写真家」という匿名者によるドキュメントとして発表され、写真家の名を伏せたままロバート・キャパ賞を受賞しました。クーデルカがこの写真の作者であると名乗りを上げることができたのは、1984年、彼の父親がチェコで亡くなった後のことだったのです。

東西に分断された欧州や冷戦下の政治的状況を顕したこれらのエピソードは、20世紀の伝説となり、世界中のジャーナリストたちによって語り継がれています。

本展覧会は、突然、街を埋め尽くした戦車に人力で立ち向かったプラハ市民の勇気ある記録をクーデルカの臨場感溢れる写真から振り返り、当時の市民に起きたことをいかに自身の身に引き寄せ、私たちの未来の歴史の糧とするかを検証するものです。

■展示構成

Josef Koudelka, Invasion 68: Prague, Aperture, 2008 より 173 点（予定）

Josef Koudelka/Magnum Photos, from the book Invasion 68: Prague (Aperture, September 2008)

■本展の見どころ

- ①ロバート・キャパ賞受賞の伝説の写真家、**ジョセフ・クーデルカ**の日本初の大規模個展です
- ②チェコ事件をドキュメントした作品「**Invasion 68: Prague**」(プラハ1968)を日本初公開！
- ③**チェコやプラハに関する講演会やイベント**を開催します(詳細はホームページで発表します)
- ④**クーデルカ氏が来日予定**(※5月13日(金)15:00開催予定のプレストアーに登場します)



図版はすべて Josef Koudelka, from the Aperture monograph *Invasion 68: Prague*, ©2008 Josef Koudelka/ Magnum Photos

■関連書籍

展覧会公式カタログ：『ジョセフ・クーデルカ プラハ侵攻 1968』平凡社

2011年4月予定、本体3,800円(税別)

和訳差込み版内容：「プラハ市民の眼差しの先に」小森陽一(和英)・本書和訳(阿部賢一氏 立教大学文学部准教授)・展覧会テキスト 丹羽晴美(和英)

■作家略歴：ジョセフ・クーデルカ

1938年チェコスロヴァキアのモラヴィア生まれ。14歳の頃、自ら摘んだ野いちごを売り歩いたお金で6×6のカメラを買い、初めて写真を撮った。その後、プラハ工科大学で工学を専攻し、卒業後の61-67年、プラハやブラティスラヴァで航空エンジニアとして働いたが、その間も独学で写真を撮り続けていた。

1961年、月刊誌『劇場』に定期的に写真を掲載することになり、芝居の写真を撮り始めた。その後、ビハインド・ザ・ゲート劇場のディレクターからも声が掛かり、以来、舞台写真は初期の代表作となった。そして、この頃から、後の代表作「ジプシー」となる、ロマをテーマに撮り始めた。

彼の初期作品は、「ジプシー」「エグザイル」等の表現に繋がるようなシンプルに被写体を捉える視点や、光と影をグラフィカルに構成する実験的なものまで、独自の手法で制作されていた。

1967年、クーデルカは航空エンジニアの職を辞し、写真家の道を選ぶ。同年、「劇場」シリーズが評価され、チェコスロヴァキア美術家連盟年度賞を受賞し、個展を開催した。ここで初めて展示された「ジプシー」は、生活そのものに密着する圧倒的な取材力と、無駄なく被写体に迫る表現によって高い評価を得る。

今回展示の「プラハ 1968」は、ルーマニアでのロマの取材を終えた1968年8月21日に、プラハに帰郷した際におこった「チェコ事件」をドキュメントした作品である。

■チェコスロヴァキア「プラハの春」と「チェコ事件」について

ソ連では、スターリンの死去から3年が経過した1956年に、ソ連共産党第一書記ニキータ・フルシチョフがスターリン体制を批判。スターリン執政期における秘密の一部を暴露し、個人崇拜を批判した。このことはチェコスロヴァキアにも影響が及び、1953年から続くアントニン・ノヴォトニー（共産党第一書記兼大統領）による独裁体制が揺らぎ始める。そして1968年1月3日、改革派に属するアレクサンデル・ドゥプチェクがチェコ共産党の第一書記に選ばれ、「人間の顔をした社会主義」を目指し、言論や集会の自由や市場経済などが導入され始めた。この自由化政策の動きを「プラハの春」という。1968年6月27日には「二千語宣言」が発せられ、改革への決意が示された。

しかし、このチェコの政策は、ソ連と東欧の共産主義諸国を刺激する。ソ連・東欧諸国は、1968年7月14日にポーランドの首都ワルシャワで首脳会談を行い、チェコ政府に対する警告を発した。続く7月29日にはソ連とチェコの共産党による会議が行われたが、成果は得られなかった。そして、8月20日深夜、ソ連率いるワルシャワ条約機構軍が侵攻し、チェコスロヴァキア全土を占領下に置き「プラハの春」は終焉した。これを「チェコ事件」という。

ドゥプチェク第一書記はモスクワに連行され、チェコにおける改革の中止を認める書類に署名を強制された。更に、1969年4月17日には、チェコ共産党の第一書記として保守派のグスターフ・フサークが選出され、チェコにおける自由化の動きは完全に押さえ込まれてしまった。

■クーデルカ氏を訪ねて パリにて(2010年11月) (東京都写真美術館 学芸員 丹羽晴美)

2010年秋、展覧会直前打ち合わせのためパリへ赴いた。3年前からヨーロッパへ行く度に調整していたが、毎回、クーデルカは取材に出ていて会うことはできなかった。パリ・フォトの最中なら会えると連絡が来たのは、もう秋になってからのことだった。携帯もPCも持たないクーデルカと連絡をとるのは容易なことではない。つい数年前まで、代表作「ジプシー」さながら各地を転々として暮らしていたのだ。現在は、パリとプラハを拠点に世界中を飛び回っている。この期を逃すものかと急ぎパリへ渡った。

ミーティングの日、パリ・フォト会場は大混雑だった。19世紀の古写真から現代美術まで扱うこのイベントの人気は高く、世界中から写真ファンや関係者が訪れる。別室で待ち合わせるのかと思っていたら、会場にふらりと本人が現れた。一瞬、緊張で会場の空気が止まった次の瞬間、クーデルカは写真ファンに取り囲まれてしまった。が、飛びぬけて背が高い彼は笑顔のまま何ら動ぜず、皆と話したり、サインをしたりしながら、人垣の向こうにいる私を見つけて、目で合図をした。「君だね、君。会いたかったよ」と、とびきりの笑顔で素早く近づくと、大きな肩ですごい人並みを難なくかき分け、別室へエスコートしてくれた。

打ち合わせ中、ジョセフはご機嫌だった。2008年に「プラハ 1968」を企画し、同書を出版しているアパチャーの編集長メリッサ・ハリスも同席し、これまで巡回してきたニューヨークやプラハの様子を聞かせてくれた。「当時のプラハみたいだね、展示室の入口に街中のグラフィック・サインやポスターを貼りまくったんだ。東京ではどう？同じようにできるかな？雰囲気作りだからね、君が好きに貼っていいんだよ。僕も貼ろうかな」等と展覧会の具体的なプランも提案し合った。

打ち合わせ後、インタビューを行った。「僕は航空エンジニアだったから写真は独学でね、プラハの中央図書館によく通ったよ。スイスのアート・グラフィック誌『グラフィクス』なんてよく見たな。『ライフ』や『パリマッチ』は見なかったね。僕はジャーナリストじゃなかったし、当時のプラハでは見られなかったからね」「今は『ジプシー』シリーズの新編集に取り組んでるんだ。100点以上の写真集になるから、なかなか大変な作業でね。写真を選んで、シーケンスとか見開き写真を決めたりして。来年には出版だ。」「最新シリーズは8年がかりで取材した採石場のものなんだよ。ほら、日本人にもいたねえ…えーと、畠山かな？彼のものとはちょっとちがうけど」と饒舌に語る彼が沈黙してしまったのは、話が「プラハ 1968」当時の内容になった時だった。

1968年8月21日、運命の日、クーデルカは「人生の中で起こるべき事が全て起きてしまったように感じた」という。当時、ようやく写真家として認められ始め、プラハの個展で初めて「ジプシー」を展示して好評を得た。そしてルーマニアへも足を伸ばしてロマを取材し、揚々とプラハへ帰った。その翌日、街は戦車で埋め尽くされ、運命が大きく転換していく。市民一丸となった1週間の激しい抵抗もむなしく、言論や表現、行動の自由が奪われてしまっ

たのだ。この1週間に何が起きたのかを記録した貴重な写真を西側へ持ち出し、発表することができたからこそ、「伝説の写真家 ジョセフ・クーデルカ」が存在するのだが、彼はこの当時のことを語りたがらない。「すでに隅々までチェックしたインタビュー記事があるから、それを読んで。同じ質問には二度と答えたくない」とかたくなに口を閉ざす。冷戦下で「プラハの春」を潰され、共産主義政権の中で統制された生活を強いられた当時の状況は、私達の想像をはるかに超えたものだったろう。1969年にマグナムを通じてこのルポルタージュが世界に配信された時、彼と家族の身の安全のために写真家の名は伏せられたままだった。実際、1984年にクーデルカが名乗りを上げたのは、彼の父が逝去した後のことだ。

プラハ侵攻と同じ頃、東京では学生達が権力に立ち向かっていた。そしてその時、解決できなかった問題と政治が未だに日本を苦しめている。内容がこのことに及んだ時、彼は重い口を開いた。「この写真はもう 40 年以上前のものだけど、だからこそ出てくる意味があるんだ。この記録は昔のプラハのことじゃなくて、いまでも侵略され圧政に苦しんでいる人々に関することなんだよ」。

市民一丸となってあらゆる「言葉」と知恵を使い戦車に立ち向かったこの貴重な記録は、現代の日本においても、有効な示唆を与えてくれる。クーデルカは「僕は言葉より写真の方が饒舌だから、写真を選んだんだ」と力強くつぶやいた。

「まだ多くは語れないんだけど、いま地中海沿岸を撮っていて、いずれ考古学的視点でまとめようとしてるんだよ。12 月にはイスラエルに行くんだ。」と、現在の制作活動の話になると、普段のおしゃべりが止まらないジョセフに戻っていた。筆者もその頃テルアビブにいることを伝えるとスケジュールを細々と尋ねられ、予定が合わないことが分かると「うーん、実に残念だねえ。案内できると思ったのに、また今度だね。じゃあ、まず君が春に東京を案内してね」と茶目っ気たっぷりにウィンクし、来日を約束した。

■担当学芸員によるフロアレクチャー

日時：第 2・第 4 金曜日および 5 月 14 日（土） 14:00～

■関連講演会

「対談 小森香子（詩人）×小森陽一（日本文学者）」

日時：5 月 21 日（日）14:00～15:30

展覧会カタログ執筆者の小森陽一氏は 1965 年（当時 15 歳）までプラハで暮らしていらっしゃいました。チェコ事件の印象と、日本人はそれをどう受け止めたかを、母・小森香子さんと対談していただきます。

■プレスギャラリーツアーのご案内

展覧会開催日の前日に、プレスの皆さまを対象にしたプレスギャラリーツアーを開催します。

日時：2011 年 5 月 13 日（金）15:00～16:00（14:30 受付開始）

場所：東京都写真美術館 2 階展示室

出演：ジョセフ・クーデルカ（出品作家）（予定）、笠原美智子（東京都写真美術館事業企画課長）、丹羽晴美（展覧会担当学芸員）

※開催時間等の詳細は、後日郵送にて正式にご案内いたします。

※クーデルカ氏への個別取材は予定しておりませんが、可能な限りツアー内にてご質問をお受けいたします。

■開催概要

観覧料 一般 800（640）円、学生 700（560）円、中高・65 歳以上 600（480）円

※（ ）は 20 名以上の団体料金および東京都写真美術館友の会会員割引料金

※小学生以下および障害をお持ちの方とその介護者は無料 ※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

会場 **東京都写真美術館** 2 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話番号 03(3280)0099 / ホームページ www.syabi.com

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 入館は閉館の 30 分前） **※最新の開館情報はお問合わせください**

休館日 毎週月曜日（ただし 7 月 18 日は開館）

交通機関 JR 恵比寿駅東口改札より徒歩約 7 分・東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約 10 分
当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

■お問い合わせ

東京都写真美術館事業企画課 電話：03(3280)0034 Fax：03(3280)0033

展示担当 丹羽晴美（にわ・はるみ）h.niwa@syabi.com / 山峰潤也（やまみね・じゅんや）j.yamamine@syabi.com

広報担当 久代明子（くしろ・あきこ）a.kushiro@syabi.com / 平澤綾乃（ひらさわ・あやの）a.hirasawa@syabi.com

前原貴子（まえはら・たかこ）t.maehara@syabi.com

このリリースに掲載している図版をプレス用にデータでご用意しています。上記、広報担当までお申し出ください